

印象形成における情報処理過程

——Person Memory を中心として——

池 上 知 子

Information processing in impression formation

——Problems in Person Memory——

IKEGAMI Tomoko

I 序

我々は、他者の言動を一定の時間観察したり、誰かがその人物の特徴を述べるのを聞いたりして、その人がどのような人物なのか印象を形成する。印象形成の研究は、他者に関する個々ばらばらの情報が、どのような過程によって組織化され、あるまとまりのある全体像が形成されるのであろうかという問題を中心として展開してきている。歴史的にみると、印象形成の研究には二つの大きな波があったといえる。

第一の波は、Asch (1946) が印象形成の問題を初めて実験的に取り扱ったことにより起こった。Asch (1946) は、まず、心理学科の女子学生に、“一人の人物の性格特性である”として、刺激語を順次読みきかせ、これらからこの人がどんな人物であるかを記述させた。彼は、次のA、B 2つのリストを使い、被験者のつくる全体像のちがいを検討している。

リストA：聡明な→器用な→勤勉な→温かい→決断力のある→实际的な→用心深い

リストB：聡明な→器用な→勤勉な→冷たい→決断力のある→实际的な→用心深い

2つのリストは、“温かい”“冷たい”の部分が違うだけなのに、A群(Warm群)とB群(Cold群)では、記述された全体像の間かなりの差異が認められている。また、被験者は、自由記述のほかに、あらかじめ用意された特性形容詞対(例えば、非社交的—社交的)18項目で、どちらかを強制選択することを求められている。この反応結果をみると、“寛大さ”“賢明さ”“良い性質”“ユーモアのある”などの項目で、A群はB群に比べてかなり高く評価されていた。これらの結果から、Asch は、全体印象の成立過程には、各刺激語が均等な重みで参加するのではなく、“温かい”“冷たい”のように中心機能をはたす語とそうでないものがあると考えた。Asch の見出した“Warm-Cold effect”は、その後、実際の場面で実在の人物を刺激とした Kelley (1950)の実験でも確かめられている。Asch は、全体印象は、個々の特性の単なる合計ではなく、個々の特性を超えた根源的パーソナリティとしての“総合的全体”が、まず、成立し、個々の特性は、逆に、この全体によって規定されると主張した。Asch 流の研究の背後には、ゲシュタルト的構想の有効性を実証しようという意図があったといえる。Asch (1946)の研究は、印象形成研究の出発点としての意義をもつが、その後の研究が、すべて、Asch の実験結果と一致したわけではなく、また、結果の解釈にも Asch とちがう考え方をとる人もいた (Wishner, 1960;

Podell, 1961; Anderson, 1962)。

第二の波は、Anderson (1962) が、Asch のゲシュタルト的構想に直接異を唱えたことが、契機となった。Anderson は、一人の架空の人物の性質をあらわすものとして、3つの特性形容詞からなる刺激セットをつくった。被験者は、各刺激セットを見たのちに、このような人物の望ましさを程度を評定することを求められた。彼は、3つの刺激 (i, j, k) がそれぞれ単一で与えられたときの望ましさを程度を、 a_i, b_j, c_k としたとき、3個全体から想像される人物の望ましさを程度 R_{ijk} は、

$$R_{ijk} = 1/3 (a_i + b_j + c_k)$$

であり、加算モデルからの差 d_{ijk} は、多くの場合、ゼロに近いものであったという。つまり、全体印象は個々の刺激価の単純な合計(加算)であって、Asch のいう“総合的全体”の概念を導入する必要はないとしたのである。Asch (1946) の研究では、全体印象が個々の刺激価の単純な加算や平均ではないことに重点がおかれているが、Anderson らを中心とするその後の研究者たちは、むしろ、個々の刺激価と全体印象の評定値との間に特定の代数的関係を仮定し、情報統合のモデルをいくつか立てては、それを実証しようとしている (Anderson, 1962, 1965, 1968, 1974)。しかし、Anderson らの一連の研究では、常に、全体印象を“望ましさを程度”という単一次元に還元して論議しており、はたして、これで他者のパーソナリティについての全体像の成立過程を把握していることになるのかといった反省が求められている。すなわち、彼らの研究は、個々の代数的モデルの適合度を評価することに主眼がおかれ、印象そのものの質や形成過程の問題を見逃してきたといえる。

Asch と Anderson の二つの大きな研究の波に対し、最近、“第三の波”ともいえる新しい研究の動向がある。それは、Hastie & Carlston (1980) らに代表される“Person Memory” (対人記憶) と称される一連の研究である。彼らは、情報統合の代数的モデルの検証という問題から離れ、他者についての全体印象が形成される認知過程に注目して研究しようとしている。これは、ある意味で Asch に戻りつつあるともいえるが、ただし、Asch らがゲシュタルト的構想にもとづき、自由記述の結果をいわば直観的に分析するという方法にのっとっていたのに対し、“Person Memory” の研究者は、近年の認知心理学の理論的枠組と、記憶成績や反応時間を指標とする実験パラダイムによって、印象形成過程のメカニズムを解明しようとしている。

そこで本研究では、最近の“Person Memory”の研究動向を探りながら、人は、他者に関する情報をいかに統合し、その人物の記憶表象を形成するのかという視点から、印象形成過程のしくみを考察する。

II 印象形成における情報統合活動

Hamilton, Katz & Leirer (1980 a) は、“印象”とは、“他者についての組織化された認知的表象”であると定義し、認知者は、順次提示される情報を、形成されつつある印象の中へ能動的に統合し、一貫した全体表象を形成すると考えた。統合された全体像を考える点は、Asch (1946) の流れをくんでいるといえるが、Asch の考えでは全体の成立が受動的であったのに対し、Hamilton らが、主体の側の能動的な認知活動を強調していることは、注目すべきである。

Hamilton, Katz & Leirer (1980 b) は、印象形成に固有の情報の組織化過程があるとして、

その特質を明らかにしようとした。彼らは、15個の行動記述文からなるリストを用意した。そして、大学生の被験者のうち半数には、15文は一人の人物の行動であるとして、その人物の印象を形成するように教示し(印象形成条件)、残り半数には、ただ、15文をできるだけたくさん覚えるように教示した(記憶条件)。被験者は、順次提示された記述文を読み(第1実験はスライドで提示され、第2実験は小冊子が用いられている)、5分くらいの挿入課題を行なった後、記述文を再生するよう求められた。Hamilton et al. (1980 b) の立てた第一の仮説は、“印象形成では、個々の情報が一人の人物に関連したものとして結び合わされ、一貫性のある構造をなすので、単に記憶教示を与えた場合より、むしろ、記憶の成績は良くなる”であった。また、彼らの用意したリストは2種類あった。リストの一方は、15文のうちまん中(8番目)の一文を除く14文が、ごくありふれた、価値的にはやや望ましい日常の行動を記述した文で、まん中の一文だけ望ましくない行動を記述した文であった (Distinctive 条件)。もう一つのリストは、まん中の項目も他の14文と同じありふれた日常行動を記述した文であった (Nondistinctive 条件)。彼らの第二の仮説は、“印象形成において情報を組織化する際、他の特性情報と顕著にちがう情報項目 (Distinctive 項目) が、Focal Point となる。従って、印象形成条件と記憶条件の記憶成績の差は、Distinctive 条件においてより顕著になる”であった。まん中の項目を除く14項目の平均再生数を各条件についてプロットしたのが Fig. 1-1 であった。実験1, 2とも、印象形成条件の方が記憶条件よりも再生数が多く、第一の仮説は支持された。第二の仮説に関しては、実験2の結果のみ支持的で、Distinctive 項目は、印象形成条件では再生を促進し、記憶条件では抑制していたが、実験1では、両条件とも抑制的に働いており、一貫していなかった。被験者は、また、“前-後弁別課題”(まん中の項目を除く14文が、まん中の文より前にあったか、後ろにあったかを弁別させる課題)を行なっている。その結果を示した Fig. 1-2 をみると、実験1, 2とも、印象形成条件でかつ Distinctive 条件の場合に、エラーが最も少なかった。しかし、Fig. 1-2 をみてわか

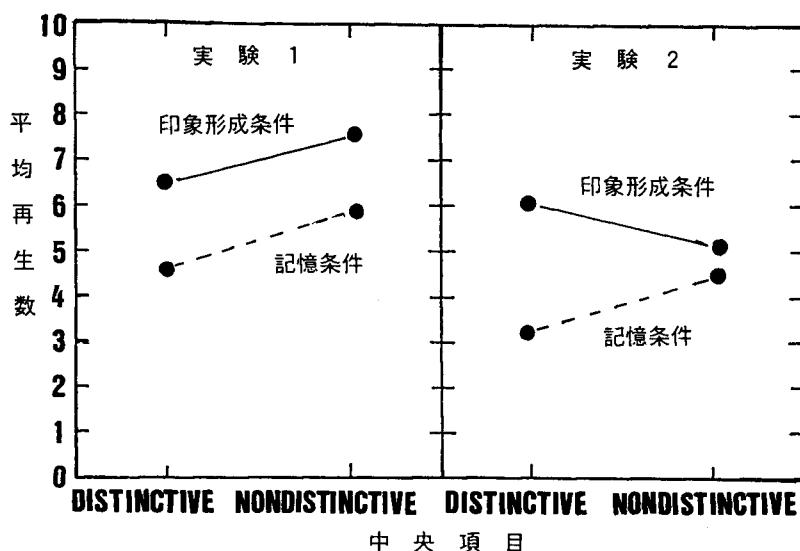


Fig. 1-1 教示条件と中央項目の顕著性が平均再生数に及ぼす効果
(Hamilton, Katz, & Leirer, 1980b)

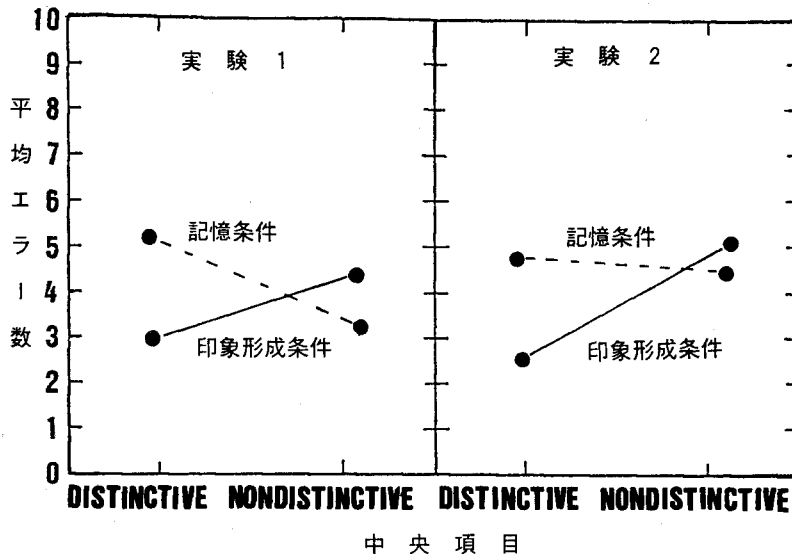


Fig. 1-2 教示条件と中央項目の顕著性が前—後弁別課題のエラー数に及ぼす効果
(Hamilton, Katz, & Leirer, 1980b)

るように、第二の仮説を裏づける明確な傾向は、実験2の結果だけであった。これらの結果から、Hamiltonらは、印象形成過程では、個々の情報が相互に関連づけられて、全体印象の中へ統合されるという高度な情報の組織化が行なわれるが、組織化過程での Distinctive 項目の機能は明確ではないとした。これは、彼ら自身も推察しているように、Distinctive 項目が Focal Point となって、他項目とのあいだの関連づけがなされたというよりは、他の14項目にもとずいて一貫性のある表象が形成され、これと矛盾する1項目は、全体の中へ統合されることなく孤立して貯蔵されたと考える方が妥当であろう。

それでは、印象形成条件では、どのようなメカニズムで情報の組織化が行なわれるのであろうか、記憶条件の場合とどこが違うのかという問題が残る。この点に関して、Hamilton, Leirer & Katz (1979) が、群化の指標を用いて、組織化過程を直接的にとらえようと試みている。彼らは、パーソナリティ特性に関連した4種のカテゴリー（対人面、知的面、スポーツへの関心、宗教への関心）のどれかに属するような行動記述文からなるリストを用意し、再生量とカテゴリーによる群化の量の関係を検討している。結果は、印象形成条件の方が記憶条件よりも、再生量も群化量も多かった。また、刺激リストを1回だけでなく2回提示すると、再生量は印象形成条件でも記憶条件でも増大し、両条件間の差は小さくなったが、群化量は、印象形成条件での増大の方が著しく、両群の差は、むしろ大きくなっている (Fig. 2-1, 2-2)。これらの結果から、Hamiltonらは、印象形成では、特性カテゴリーにもとずいて情報を組織化する程度が高いと解釈した。印象形成での情報の組織化には、パーソナリティ特性に関する社会的知識の枠組（カテゴリー）が、重要な役割を演じていることを、彼らは示唆したといえよう。しかし、Hamilton et al. (1980 b, 1979) の研究は、結局は、項目どうしの関連づけについて論議している。印象形成で重要なのは、全体像であって、個々の項目がその全体とどのように関連づけられ統合されるのかという問題に、彼らは十分に答えていないように思われる。この点を解明していくためには、

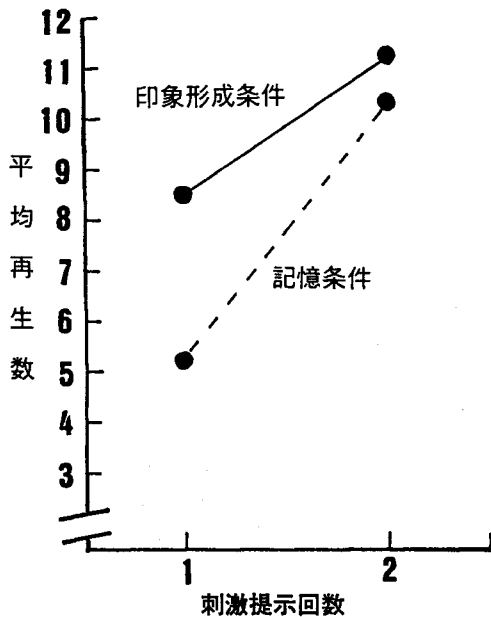


Fig. 2-1 教示条件と刺激提示回数が平均再生数に及ぼす効果
(Hamilton, Leirer, & Katz, 1979)

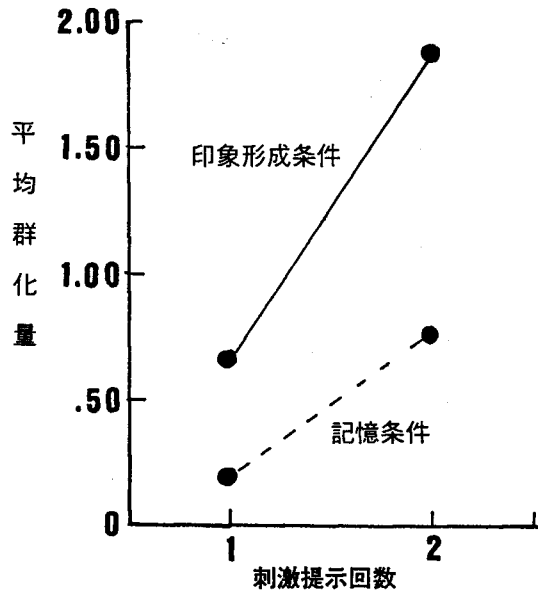


Fig. 2-2 教示条件と刺激提示回数が平均群化量に及ぼす効果
(Hamilton, Leirer, & Katz, 1979)

印象形成教示が項目全般の再生量に及ぼす効果をみるだけでなく、再生された項目のタイプを、形成された全体印象との関連で分析する必要がある。

III 印象形成におけるパーソン・スキーマの機能

Cantor & Mischel (1977) は、仮想人物を設定するとき、特性形容詞を功妙に組み合わせ、全体として外向的な性格と認知される人物、内向的な性格と認知される人物、外向的でも内向的でもない人物を用意した (Table 1)。被験者は、仮想人物に関する一連の特性記述文を一文ずつスライドで提示された (例：ローラは活発である)。Cantor & Mischel (1977) は、被験者は一連の特性情報から、それらを抱括するような基準概念であるプロトタイプ (外向性、内向性) を抽出し、このプロトタイプにもとずいて人物の全体像を形成し、情報の組織化を行なうと考えた。プロトタイプというのは、本来、視覚的図形 (ドット・パターン、顔図形) や自然事物の認知過程を説明する概念として提唱されたもので (Posner & Keele, 1968; Reed, 1972; Rosch, 1973, 1975)、これを Cantor & Mischel (1977, 1979) が、パーソナリティ情報の処理という社会的認知事態にも導入し拡大適用したのである。さて、被験者は、6個の特性尺度上で印象を評定したのち、提示された特性形容詞について再認テストを受けた。再認テストでのディストラクター項目には、プロトタイプ (外向性、内向性) に関連のある項目とそうでない項目が含まれていた (Table 1)。これは、プロトタイプに類似したディストラクター項目は誤まって再認されやすいという知見 (Franks & Bransford, 1971; Posner & Keele, 1970) にもとづいている。指標としては、“あった”か“なかった”かについての確信度評定がとられたが、その結果、プロトタ

Table 1 外向的, 内向の人物及び統制条件の人物の記述と再認テストに用いられた特性語
(Cantor & Mischel, 1977)

記 銘 項 目	再認テスト項目	記 銘 項 目	再認テスト項目
外向的性格		内向的性格	
Energetic (M)	Dominating (M)	Discreet (M)	Hesitant (M)
Entertaining (M)	Energetic (M)	Hesitant (M)	Oversensitive (M)
Impulsive (M)	Neat (U)	Sad (M)	Practical (U)
Dominating (M)	Punctual (U)	Oversensitive (M)	Lucky (U)
Friendly (M)	Spirited (H)	Unsocial (M)	Quiet (H)
Ambitious (M)	Exuberant (H)	Bashful (M)	Timid (H)
Honorable (U)	Outgoing (H)	Lucky (U)	Shy (H)
Logical (U)	Boisterous (H)	Accurate (U)	Reserved (H)
Punctual (U)	Lively (H)	Practical (U)	Mediative (H)
Neat (U)	Bold (M)	Modern (U)	Studious (M)
	Vigorous (M)		Lonesome (M)
	Venturesome (M)		Cautious (M)
	Sensible (U)		Original (U)
	Ethical (U)		Unsophisticated (U)
	Thrifty (U)		Efficient (U)
非外向的性格		非内向的性格	
Precise (U)	Courteous (U)	Imaginative (U)	Observant (U)
Courteous (U)	Deliberate (U)	Observant (U)	Able (U)
Deliberate (U)	Generous (U)	Tough (U)	Moderate (U)
Constructive (U)	Constructive (U)	Refined (U)	Ungraceful (U)
Generous (U)	Inventive (U)	Candid (U)	Respectful (U)
Tolerant (U)	Nonchalant (U)	Able (U)	Kindly (U)
Serious (U)	Modest (U)	Moderate (U)	Inoffensive (U)
Earnest (U)	Trustful (U)	Cooperative (U)	Disciplined (U)
Appreciative (U)	Talkative (H)	Productive (U)	Daydreamer (H)
Inexperienced (U)	Enthusiastic (H)	Ungraceful (U)	Withdrawn (H)
	Self-assured (H)		Inhibited (H)
	Vivacious (H)		Soft-spoken (H)
	Boastful (M)		Self-conscious (M)
	Active (M)		Subtle (M)
	Daring (M)		Solemn (M)
	Eager (M)		Melancholy (M)

注) カッコ内の文字は, 外向性 - 内向性次元との関連度を示す。

H: 関連の高い語 M: 関連度が中位の語 U: 関連のない語

イブ (外向性, 内向性) に関連のある項目は, 無関連な項目よりも, 提示リストに含まれていなくても“あった”とより強く確信されることが示された。統制条件の仮想人物では, このようなプロトタイプ・バイアスは認められなかった。以上のことから, 被験者は, 相互に関連性のある特性がいくつか与えられると, 暗黙の特性スキーマを働かせ, 他の特性を把握する中心的特性 (外向性, 内向性) を核として他の特性を構造化し, 一貫した人物の全体表象を形成するのだと, Cantor らは解釈した。そして, いったん全体表象が形成されると, 後続の情報処理においても,

安定した表象構造を維持するようなメカニズムが働くため、プロトタイプ・バイアスがみられるのだとした。同じく、特性形容詞を用いて、プロトタイプの抽出過程を検討した Tsujimoto (1978) も、Cantor らの考えを支持する結果を得ている。

さて、Cantor & Mischel (1977) は、“外向型”とか“内向型”というように、性格特性によるパーソン・カテゴリー (Person Category) を考えたが、Cohen (1981) は、“図書館司書”とか“ウェイトレス”といった職業によるパーソン・カテゴリーを考え、やはり、プロトタイプ・バイアスがみられることを示した。Cohen (1981) の被験者は、一人の女性の生活様式(食事、趣味、服装など)に関する情報を含んだビデオ・テープを観察した。被験者の半数は、“彼女は図書館司書である”と前もって告げられ、残り半数は、“彼女はウェイトレスである”と告げられた。フィルムの内容は、“図書館司書”と“ウェイトレス”の各々から連想される生活様式の特徴を同数ずつ含むものであった。被験者には、フィルムの中の女性に対する印象を評定させた後、フィルムの内容について再認テストを行なっている。その結果、先行情報(職業が図書館司書かウェイトレスかに関する情報)に一致する内容の項目の正答率が、一致しない項目よりも高いことが示されたのである。

Cantor & Mischel (1977) や Cohen (1981) の研究は、被験者の側の先行知識と入力情報の相互作用によって、人物に関する“パーソン・スキーマ”(Person Schema) が活性化され、このスキーマに合致する特性を中心として、全体表象が形成されると考えるものである。ただ、特記すべきことは、Cohen (1981) が第2実験において、パーソン・スキーマが一致情報の処理を促すだけでなく、不一致情報の顕現性を高めるように機能することを示唆する結果を見い出している点である。活性化されたパーソン・スキーマに合致する情報と合致しない情報の処理についての議論は、Hastie & Kumar (1979), Hastie (1980, 1981) らによって展開されている。

Hastie & Kumar (1979) は、被験者に、先行情報として刺激人物のパーソナリティを示す特性形容詞のセット(例：知的な、賢い、利口な、……)を与えた後、20個の行動記述文を読んでさせた。被験者は、“刺激人物のパーソナリティ印象を形成し、どんな行動記述文があったか覚えておくように”教示されている。20個の行動記述文のうち、12個は先行情報によって示されたパーソナリティ特性に合致し (Congruent 項目)、4個は合致せず (Incongruent 項目)、残り4個は無関係な内容であった (Neutral 項目)。自由再生テストの結果をみると、Incongruent 項目の再生率が一番高く、次は Congruent 項目で、Neutral 項目は再生率が一番低かった。このことから、Hastie らは、個々の事実行動を刺激人物の全体表象の中へ統合していく過程では、先行情報によって活性化された特性スキーマが重要な機能をもつと主張した。しかし、Incongruent 項目の方が再生率が良かったという事実は、スキーマに合致する情報の方が処理されやすく、記憶の成績も良いという知見に反していた。ただし、Incongruent 項目の数が少なかったことから、セット・サイズ効果(項目の少い方が再生率が高くなる)が混入していることも考えられるとして、第2、第3実験では、これを分離するため、Congruent 項目と Incongruent 項目が同数ずつの条件を設定し検討している。その結果、同数条件でも、Incongruent 項目の方が再生率が高くなることを見い出した。Hastie らは、Incongruent 項目は、一貫した全体印象の中へ統合されるのが困難であるがゆえに、より入念に深く処理され、むしろ、記憶痕跡が強く残ると解釈した。これは、記憶心理学における処理水準説をめぐる最近の理論的動向 (Craik &

Lockhart, 1972; Craik, 1977; Baddeley, 1978) に沿った解釈であった。さらに, Hastie (1980) は, スキーマ理論やプロトタイプ理論に符号した研究の大半が再認パラダイムを用いている (Cantor & Mischel, 1977; Snyder & Uranowitz, 1978 など) のに対し, 彼の見出した結果は, 再生テストの成績であることを重視し, 再生事態で, Incongruent 項目が検索されやすいような構造をもつ記憶表象が, 印象形成過程でつくられるのだと論じた。Hastie (1980) は, 一貫した印象の中へ情報を統合していく過程で, 刺激人物のノード(サブジェクト・ノード)と人物の事実行動を示す各項目のノードとのあいだに, それらを相互に関連づける径路が形成されるのだと考えた。その際, Incongruent 項目は, 既成の枠組と矛盾しているゆえに, より積極的に他項目のノードとの関連づけが試みられ, 多くの径路が形成され, 検索されやすくなるとした。Hastie (1980) は Fig. 3 のようなネットワーク構造をもつ刺激人物の全体表象を模式化して示した。Hastie のモデルは, いわば, Anderson & Bower (1973) の HAM モデルと Craik & Lockhart (1972), Craik (1977) の処理水準説を合成したようなモデルといえる。

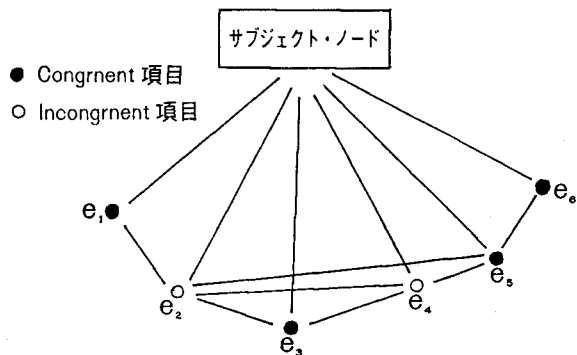


Fig. 3 人物に関する記憶表象のネットワーク構造 (Hastie, 1980)

この Hastie (1980) のモデルは, Srull (1981) によって, 体系立てられ多角的に検証されている。Srull は, Incongruent 項目と Congruent 項目が同数の場合だけでなく, Incongruent 項目の方が多い場合にも, Incongruent 項目の再生率がまさっていたことから, これは, まさに, 能動的に形成された径路の数が, 再生量に強く影響していることの証拠であると述べた。Fig. 3 の模式図から明らかなように, 例えば, Congruent 項目 e_1 は, サブジェクト・ノードと Incongruent 項目 e_2 からの 2 つの径路があるだけだが, Incongruent 項目 e_2 は, サブジェクト・ノードと Congruent 項目 e_1, e_3, e_5 , さらに, Incongruent 項目 e_4 からの 5 つの径路があり, 径路の数の多い分だけ想起される率が高くなるわけである。ところで, 径路の形成が, Incongruent 項目を中心として活発になされるとしたら, Congruent 項目の数を一定にして, Incongruent 項目を増加すれば, Congruent 項目への径路が相対的に増大し再生率も上がるが, 逆に, Incongruent 項目数が一定で, Congruent 項目が増加しても, Incongruent 項目への径路は増大せず再生率も向上しないことが予測される。Srull (1981) は, 第2, 第3実験でこの予測を裏づけている。

さて, Hastie (1980) モデルの重大な問題点は, 印象形成過程の初期に活性化されたパーソン・スキーマがどこまで保持されているのかということである。後続の情報によって, スキーマ自体が変容し, 修正されるとしたら, 実験者側で仮定している Congruent 項目と Incongruent 項目の区別があいまいになるからである。特に, Srull (1981) の実験における Incongruent 項目の方が多いような条件では, 全体印象の質が変わってしまっていて, もはや, Incongruent 項目ではなく, Congruent 項目として認知されていたことも考えられる。従って, 印象形成過程で

パーソン・スキーマが重要な機能をはたしていることは否めないが、その際、スキーマを固定されたものと考えただけでなく、後続の情報との相互作用によって変容しうるダイナミックな側面もとらえていく必要があろう。

これまでの研究 (Cantor & Mischel, 1977; Srull, 1981 など) は、入力情報が、被験者のもつパーソナリティ特性に関する知識の構造といかに作用し合って、取り込まれていくかに注目している。即ち、両者の相互作用によって、人物の全体印象が形成されるという考え方が基本にあり、人間の情報処理過程は、既有知識の枠組によって規定されるという“Top Down”的構想が、背後にあるといえよう。

ただし、いわゆる社会的情報の処理を扱っていくときに忘れてはならないのは、個々の情報がきわめて多義的であいまいであるということである。特に、パーソナリティ特性に関する知識の枠組を、客観的に規定するのは、むずかしいといえる。例えば、外向的か内向的かといっても、その境界はきわめてあいまいで、個々の具体的属性や行動特性がどちらのカテゴリーに含まれるかは、一義的には決められない。今後は、こうした社会的情報における“フジネス”(Fuzziness)の問題をどのように考慮していくかが重要な課題となろう。

さて、これまで即有の知識の役割を論じてきたわけだが、印象形成では、単に一般的な意味での知識構造の要因だけでは、説明できない部分がある。例えば、他者のパーソナリティ認知において、意識的にしろ無意識的にしろ、自分自身のパーソナリティと比較するような過程が働いているというようなことは十分予想され、こうした個人的で特殊な要因の介在も考えなくてはならない。

IV 印象形成と自己概念

Markus & Smith (1981) は、人は自分についての知識のシステム、“セルフ・スキーマ”(Self-Schema) をもっており、これが、パーソナリティ情報の処理において重要な機能を果たすと論じている。セルフ・スキーマを最初に実験的に取り扱ったのは、Markus (1977) であった。彼女は、女子学生に一連の特性尺度上で自己を評定させ、その反応結果から、独立-依存的、個人主義-一同調主義的、主導-追従的などの尺度で、きわめて高い値を示した者を、自分は独立的だというセルフ・スキーマをもつ群(独立スキーマ群)、きわめて低い値を示した者を、自分は依存的だというセルフ・スキーマをもつ群(依存スキーマ群)、これらの尺度でどちらでもない評定を行なった者を、“独立-依存”の次元に関してセルフ・スキーマをもたない群(ア・スキーマ群)として抽出した。これら3群の被験者に、“独立-依存”に関連する特性形容詞30個と、“独立-依存”には関連しない特性形容詞30個の計60個を1語ずつスライドでランダムに提示し、各語が自分に当てはまるか(Me 反応)、否か(Not Me 反応)をボタン押しで答えさせ(Me・Not Me 課題)、その反応時間を比較した。すると、独立スキーマ群は、独立性に関連する形容詞に対する方が、依存性に関連する形容詞に対するよりも、Me 反応がはるかに速く、依存スキーマ群では、ちょうどこの逆であった。ア・スキーマ群では、2つのタイプの形容詞のあいだに差はみられなかった。また、“独立-依存”に関連しない形容詞については、3群間でちがいは認められていない。これらの結果は、セルフ・スキーマが存在すると、それに関連する情報の処理が促進されることを示唆している。

Table 2 独立性尺度, 依存性尺度, 及びその他の尺度での各被験者群の評定値
(Markus & Fong, 1979)

評定尺度と被験者のタイプ	物語における独立的行動の割合		
	0 %	50 %	100 %
独立性尺度での平均評定値			
独立スキーマ群	4.76	7.50	9.53
ア・スキーマ群	6.50	6.98	8.70
依存性尺度での平均評定値			
独立スキーマ群	8.60	6.84	4.50
ア・スキーマ群	7.16	6.99	4.56
その他の尺度での平均評定値			
独立スキーマ群	7.60	7.85	7.21
ア・スキーマ群	7.90	7.48	7.38

それでは, 他者に関する情報の処理において, セルフ・スキーマはどのような効果をもつのであろうか, この点について, Markus & Fong (1979) が, 検討している。彼らは, 独立スキーマ群とア・スキーマ群に, “メアリー” という架空の女性について記述した物語を読ませた。物語は3種類用意され, 一つは, メアリーはきわめて独立的な女性として認知されるように, 物語中の18個の場面すべてで, 独立性を示す行動が記述され (100%条件), もう一つの物語では, 18個の半分の9個の場面では, 独立性を示す行動が, 残り9個の場面では, 独立性とは関係のない行動が記述されている (50%条件)。最後の一つは, 18個のどの場面の行動も独立性とは関係がなかった (ゼロ%条件)。被験者は, 物語を読んだ後, “メアリー” に対するパーソナリティ印象を, 独立性に関する尺度, 依存性に関する尺度, その他いずれにも関連しない尺度で評定した。平均評定値を比較すると, Table 2 のようになった。まず, 100%条件の場合をみると, 独立スキーマ群の方がア・スキーマ群よりも, “メアリー” のことをより独立的だと評価しているのがわかる。次に, ゼロ%条件をみると, 独立スキーマ群はア・スキーマ群よりも, “メアリー” のことをはるかに依存的だと評価している。彼らは, セルフ・スキーマは, 情報を解釈, 評価するときの係留点ないし枠組を与え, スキーマに関連する側面の顕現性を高めるのだと考察した。Markus & Smith (1981) は, “セルフ” (Self) が情報処理機構の中核をなし, Fig. 4 のように, 種々の情報は, まず, セルフ・スキーマによって吟味され, その後の処理が規定されるのではないかと推察している。

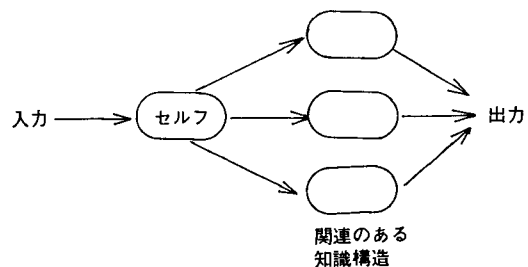


Fig. 4 情報処理におけるセルフ
(Markus & Smith, 1981)

一方, Rogers (1981) や Kuiper & Derry (1981) も, 特性情報の処理過程における “情報と自己とのかわり” (Self-Reference) の問題を論じている。Rogers, Kuiper & Kirker (1977) は, 特性形容詞の形態や意味の側面について判断させた場合より, 自分に当てはまるかどうかといった自己とのかわりで判断させた方が, あとの記憶の成績が良くなることを見い出し, 印象形成での特性情報の処理においても, “セルフ” が重要な役割を果たしているのではないかと考

えた。そして、Rogers, Rogers & Kuiper (1979) では、自分自身のことに言及しているような特性情報は、誤まって再認されやすいことを見出し、また、Rogers & Kuiper (1980) では、自分の特性とかかわりの深い次元で、他者のパーソナリティを判断するときは、他の次元よりも判断が速いことを見出ししている。Kuiper & Rogers (1979), Rogers (1981) らは、他者に関する特性情報の処理において、“セルフ”がプロトタイプとしての機能をもつのではないかと考えている。ただし、Markus & Smith (1981) らとちがって、セルフ・プロトタイプは2次的機能であって、情報が不十分で、他者についての記憶表象が不完全なときに、それを補う形で機能するものとして位置づけている。

Markus や Rogers を中心とする研究から、共通して言えるのは、自己に関連した特性情報は、非常に高度に構造化されており、処理の効率もよく、アクセスされやすいということである。従って、他者に関する情報の中で、自己とのかかわりのある情報は、特異な処理がなされ、全体印象の形成に、微妙に影響することは見逃せない。

特性に関する一般的な知識と、自己に関連した知識が、どのように協応するのか、ひいては、印象形成の一般的なメカニズムに、パーソナルな要因がどのようにからんでいるのかは、今後、詳細な研究が必要であろう。

V 残された問題

本研究では、印象形成における一般的な要因としての社会的知識と、パーソナルな要因としての自己概念をとりあげ、両者の機能について論じてきた。だが、これは、あくまで印象形成の認知的側面を論じただけであって、パーソナリティ情報の処理過程で、必然的に喚起される“感情”の問題が、依然、取り残されたままである。例えば、自分に関係する情報は、高度に構造化されているので、効率よく処理され、アクセスされやすいわけだが (Markus, 1977 など)、もう一步進んで、なぜ、自我が関与すると構造化の水準が高くなるのかといえ、感情との関係を考えることが必要となってくる。Dutta & Kanungo (1975) は、特性形容詞の Self-Reference の程度によって、それに伴って喚起される感情の強さも異なり、その感情の強さが、記憶に影響することを示した。最近では、Keenan & Baillet (1980) が、自分に関連した処理が記憶を向上させるのは、それが評価感情を伴う場合であって、単なる事実質問の処理では向上しないことを示している。もちろん、だからといって、Self-Reference 効果を、すべて評価や感情の要因に還元できないことも指摘されているが (Rogers, 1981)、Self-Reference に感情が関与していることは、否めない。

Keenan & Baillet (1980) は、また、自分に関する情報に限らず、自分にとって重要な他者、好感情をもっている人物についての情報は、未知の人物についての情報よりも、処理されるのが速く再認率も高いことを見出ししている。さらに、感情価の高い社会的情報は注意をひきやすいという報告や (McArthur, 1981)、被験者がポジティブな感情状態にあるときは、ポジティブな情報の処理が促進されるという報告 (Isen, Shalke, Clark & Karp, 1978) など、印象形成における情報処理過程に、感情が影響を及ぼすことを示唆する研究は、最近、増大している。

しかし、Higgins, Kuiper & Olson (1981) も指摘しているように、現時点では、感情の正確な意味が不明瞭であること、情報処理のどの段階で感情が関与するのかわからないこと、感情の

どんな属性(感情価, 強度など)がどのような効果をもたらすのかわからないことなどから, 情報処理モデルの中へ感情を統合していくのは容易でないとされている。

“序”で述べたように, 印象形成研究の第三の波は, 認知心理学の依拠する情報処理理論の枠組でアプローチしていくことによって始まった。だが, 主として, 単純な非社会的刺激材料を用いた研究の中から発展してきた情報処理理論だけでは, 複雑な構造をもつ社会的情報が扱われる印象形成過程の特質は, つかめないように思われる。社会的情報自体の多義性もしくはファジィ性にあいまって, 自己との関連, 他者に対する感情や評価の要因が, 微妙に影響して, 印象形成での情報統合過程の様相を複雑にしているからである。社会的情報に固有の問題点を明らかにし, これらを抱括する総合的な印象形成のモデルを構築する必要がある。

引用文献

- Anderson, J. R., & Bower, G. H. 1973 *Human associative memory*. Washington, D. C.: Winston.
- Anderson, N. H. 1962 Application of an additive model to impression formation. *Science*, 138, 817-818.
- Anderson, N. H. 1965 Averaging versus adding as stimulus-combination rule in impression formation. *Journal of Experimental Psychology*, 70, 394-400.
- Anderson, N. H. 1968 A simple model for information integration. In R. P. Abelson, E. Aronson, W. J. McGuire, T. M. Newcomb, M. J. Rosenberg, & P. H. Tannenbaum (Eds.), *Theories of cognitive consistency: A sourcebook*. Chicago: Rand McNally.
- Anderson, N. H. 1974 Information integration theory: A brief survey. In D. H. Krantz, R. C. Atkinson, R. D. Luce, & P. Suppes (Eds.), *Contemporary developments in mathematical psychology*, Vol. II, 236-305. San Francisco: Freeman.
- Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 41, 258-290.
- Baddeley, A. D. 1978 The trouble with levels: A reexamination of Craik and Lockhart's framework for memory research. *Psychological Review*, 85, 139-152.
- Bransford, J. D., & Franks, J. J. 1971 The abstraction of linguistic ideas. *Cognitive Psychology*, 2, 331-350.
- Cantor, N., & Mischel, W. 1977 Traits as prototypes: Effects on recognition memory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 38-48.
- Cantor, N., & Mischel, W. 1979 Prototypes in person perception. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 12. New York: Academic Press.
- Cohen, C. E. 1981 Person categories and social perception: Testing some boundaries of the processing effects of prior knowledge. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 441-452.
- Craik, F. I. M. 1977 Depth of processing in recall and recognition. In S. Dornic (Ed.), *Attention and Performance VI*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Craik, F. I. M., & Lockhart, R. S. 1972 Levels of processing: A framework for memory research. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 11, 671-684.
- Dutta, S., & Kanungo, R. N. 1975 *Affect and memory: A reformulation*. Oxford: Pergamon Press.
- Hamilton, D. L., Katz, L. B., & Leirer, V. O. 1980a Organizational processes in impression formation. In R. Hastie, T. M. Ostrom, E. B. Ebbesen, R. S. Wyre, Jr, D. L. Hamilton, & D. E. Carlston (Eds.), *Person memory: The cognitive basis of social perception*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- Hamilton, D. L., Katz, L. B., & Leirer, V. O. 1980b Cognitive representation of personality impressions: Organizational process in first impression formation. *Journal of Personality and Social*

- Psychology*, **39**, 1050-1063.
- Hamilton, D.L., Leirer, V.O., & Katz, L.B. 1979 A clustering analysis of organizational processes in impression formation. Unpublished manuscript, University of California, Santa Barbara.
- Hastie, R. 1980 Memory for information which confirms or contradicts a general impression. In R. Hastie et al. (Eds.), *Person memory: The cognitive basis of social perception*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Hastie, R. 1981 Schematic principles in human memory. In E.T. Higgins, C.P. Herman, & M.P. Zanna (Eds.), *Social cognition: The Ontario symposium*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Hastie, R., & Carlston, D. 1980 Theoretical issues in person memory. In R. Hastie et al. (Eds.), *Person memory: The cognitive basis of social perception*. Hillsdale, N.J.: Erlbaum.
- Hastie, R., & Kumar, P.A. 1979 Person memory: Personality traits as organizing principles in memory for behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 25-38.
- Higgins, E.T., Kuiper, N.A., & Olson, J.M. 1981 Social cognition: A need to get personal. In E.T. Higgins et al. (Eds.), *Social cognition: The Ontario symposium*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Isen, A.M., Shalke, T.E., Clark, M., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory, and behavior: A cognitive loop? *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 1-12.
- Keenan, J.M., & Baillet, S.D. 1980 Memory for personally and socially significant events. In R.S. Nickerson (Ed.), *Attention and Performance VIII*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Kelley, H.H. 1950 The warm-cold variable in first impressions of persons. *Journal of Personality*, **18**, 431-439.
- Kuiper, N.A., & Derry, P.A. 1981 The self as a cognitive prototype: An application to person perception and depression. In N. Cantor, & J.F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition and social interaction*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Kuiper, N.A., & Rogers, T.B. 1979 Encoding of personal information: Self-other differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 499-514.
- Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.
- Markus, H., & Fong, G. 1979 The role of the self and other perception. Unpublished manuscript, University of Michigan.
- Markus, H., & Smith, J. 1981 The influence of self-schema on the perception of others. In N. Cantor, & J.F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition and social interaction*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- McArthur, L.Z. 1981 What grabs you? The role of attention in impression formation and causal attribution. In E.T. Higgins et al. (Eds.), *Social cognition: The Ontario symposium*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Podell, J.E. 1961 A comparison of generalization and adaptation-level as theories of connotation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 593-597.
- Posner, M.I., & Keele, S.W. 1968 On the genesis of abstract ideas. *Journal of Experimental Psychology*, **77**, 353-363.
- Posner, M.I., & Keele, S.W. 1970 Retention of abstract ideas. *Journal of Experimental Psychology*, **83**, 304-308.
- Reed, S.K. 1972 Pattern recognition and categorization. *Cognitive Psychology*, **3**, 382-407.
- Rogers, T.B. 1981 A model of the self as an aspect of the human information processing system. In N. Cantor, & J.F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition and social interaction*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Rogers, T.B., & Kuiper, N.A. 1980 Encoding of personal information about others: Effects of fa-

- miliarity. Unpublished manuscript, The University of Calgary and The University of Western Ontario.
- Rogers, T.B., Kuiper, N.A., & Kirker, W.S. 1977 Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 677-688.
- Rogers, T.B., Rogers, P.J., & Kuiper, N.A. 1979 Evidence for the self as a cognitive prototype: The "false alarms effect". *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 53-56.
- Rosch, E.H. 1973 Natural categories. *Cognitive Psychology*, 4, 328-350.
- Rosch, E. 1975 Cognitive reference points. *Cognitive Psychology*, 6, 532-547.
- Snyder, M., & Uranowitz, S. 1978 Reconstructing the past: Some cognitive consequences of person perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 941-950.
- Srull, T.K. 1981 Person memory: Some tests of associative storage and retrieval models. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 7, 440-463.
- Tsujimoto, R.N. 1978 Memory bias toward normative and novel trait prototypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1391-1401.
- Wishner, J. 1960 Reanalysis of "impressions of personality". *Psychological Review*, 67, 96-112.

(博士後期課程在学)